

国立 東京学芸大学

プログラムの名称：学芸カフェテリアによる学修・キャリア支援

-- 全学の援助資源の活用と最適化された学生支援プログラムの開発

プログラム担当者：教育学部 教授・キャリア支援推進本部長 久保田 慶一

キーワード

1. 総合学生支援機構 2. 学芸カフェテリア 3. 全学ファシリテーター
4. キャリアプランナー 5. 最適な支援計画

1. 大学の概要

東京学芸大学は、1949（昭和24）年に既存の4つの師範学校を母体として「専門の学芸を究め教員養成を主たる目的とする」新制大学として創立されて以来、日本における教員養成の中心大学として、広く教育界に有為の人材を輩出してきた。単科の教員養成系大学でありながらも、豊富な大学教員スタッフと13の附属学校園を擁し、高度な専門性に裏付けられたきめ細かな教育を行っているところに最大の特色がある。

1966（昭和41）年には大学院修士課程（教育学研究科）、1996（平成8）年には大学院博士課程（連合学校教育学研究科）を併設し、名実ともに日本の基幹的な教員養成系大学としての地歩を築いている。

教育学部は、4つの教員養成課程（初等教育教員養成課程・中等教育教員養成課程・特別支援教育教員養成課程、養護教育教員養成課程）と5つの新課程（人間社会科学課程・国際理解教育課程・環境総合科学課程・情報教育課程・芸術スポーツ文化課程）からなる。

新課程は、教育体制の上でも、カリキュラムの上でも教員養成課程と有機的に関連付けられ、幅広い学問的バックグラウンドの中で、それぞれの専門性が追求できるように工夫されている。

2. 本プログラムの概要

本学は我が国の教員養成の基幹大学として、「有為の教育者」として21世紀を切り拓く志をもつ学生を求めることをアドミッションポリシーに掲げて、これまで「高度な専門性と優れた実践力を兼ね備えた学校教員」を養成するだけでなく、「先端的な専門知識と深い教養」や「教育に関する深い造詣」をもって、生涯学習社会や産業社会で活躍する人材をも育成してきた。

社会にこうした優れた人材を常に送り出すために、本学では在學生に「期待される大学生活」を示し、学生た

ちが有意義な大学生活を送るための指針としている。

本学の学生支援は、すべての学生が「期待される大学生活」を送ることができることを理念とし、教育課程と一体化し、学生が大学生活の各ライフステージで解決していくキャリア発達課題に対応した、総合的・段階的な学生支援を目指している。

本学の教育学部は教員養成課程と新課程からなるが、前者の課程に所属する学生は何らかの教員免許の取得が卒業要件に求められ、また後者の課程に所属する学生の約半数は教員免許を取得して卒業する。本学の教員養成のための教育課程は、第3年次での附属学校園と第4年次での協力校での教育実習を学修の目標として、多くの授業科目が段階的に設定されている。

教員志望の学生がキャリア発達の課題や困難を抱える時期やその内容も、教育課程の諸段階と密接に関係しており、学生支援の体制も教育課程と一体化させている。またこうしたキャリア発達の課題や困難は学生によって多種多様であり、学生支援の内容も総合的なものとなっている。

本学は「人権教育」を必修科目とするなど教養教育に力を入れているが、学生はこれらの支援を受けることで、すべての人間が自由・平等に学習できる「人間の尊厳」をも学んでいる。現在も学生たちの多くが学内では障害者のための支援や学内広報に、学外では近隣の小・中学校の教育ボランティア活動に積極的に参加している。こうした支援サイドの経験が、児童・生徒の人権を尊重できる学校教員の育成につながっている。

2007（平成19）年度、従来の学生相談支援センターのキャリア支援部門を学生キャリア支援センターとして独立させ、これら2センターと学内のすべての学生支援組織と指導教員を統括する総合学生支援機構を設置した。本プログラムでは、全学ファシリテーターが学内の潜在的な援助資源を発掘し、社会的ニーズに対応した多様な支援メニューを開発し、ウェブ上に開設された学芸カフェテリアで提供する。学生はキャリアプランナーのガイ

ダンスを受け、自分の学修計画やキャリア発達課題に応じて、学芸カフェテリアから支援メニューを複数選択し、自分の最適な支援計画を立案できるようになる。学生は各自マイページを開設し、学修とキャリアの支援メニューを自身で管理することができ、これにより学生は、自身のキャリア発達課題に気づき、解決に向けた選択・計画・行動のプロセスを経て、自らの支援コンピタンスを高めていける。

3. 本プログラムの趣旨・目的

(1) 「見えない」援助資源の活用と支援メニューの最適化

本学は2007（平成19）年10月に「総合学生支援機構」を設置し、学生支援の全学的な実施体制を整備した。しかし傘下に入る組織と教職員が潜在的にもっている支援コンピタンス、すなわち「見えない援助資源」をいかに「見える化」して統合することで、どのような効果ある学生支援を実施していくかが今後の課題である。また学生の多くは「定食メニュー」のように提供される支援を享受するのみで、自分のキャリア発達課題を認識して、大学からの支援を自身のキャリア形成に積極的に活用していこうとする意欲にも乏しい。

この新たな取組では、学内の隠れた援助資源を発掘し最大限に効率活用することで、多種多様な支援メニューを開発し、学生が自分のニーズに合わせてこれら支援メニューを選択でき、最適化された支援メニューを計画できる支援システムの構築を目的としている。

(2) 本学にとっての意義

この取組によって本学の教育研究の施設・設備、多様な研究分野の教員や経験豊かな事務職員の人的資源を、学生支援のために有効に活用することができ、教職員の学生支援に対する意識を向上させることができるであろう。

また学生はキャリア発達の段階でさまざまな課題や困難を抱えるが、大学が個々のニーズにあった支援を提供できないほどに多様化しており、また大学が個別に対応するにしても予算に制限がある。本プログラムでは学生は自分のニーズにあった支援メニューを選択し利用できることから、学生は満足できる支援をキャリア形成に意欲的に活用することが望まれる。

4. 本プログラムの独自性（工夫されている内容）

この取組の独自性は、総合学生支援機構に全学ファシリテーター1名とキャリアプランナー2名を新たに配置し、多様な支援メニューの開発を行うとともに、学生がこれら支援メニューを活用して自身のキャリア形成に活用できる支援体制を整備することにある。学生は、ウェブ上（イントラネット）に開設された「学芸カフェテリア」から、開発された支援メニューを複数選択でき、キャリアプランナーは最適の支援計画が立案できるよう、指導・助言する。

(1) 全学ファシリテーターが開発する多種多様な支援メニュー

支援メニューの開発に当たっては、全学ファシリテーターは学内に潜在する「見えない援助資源」を「見える化」する。具体的には、総合学生支援機構の組織や人的資源がもっている支援コンピタンスを洗い出し、有機的に結合し、社会的ニーズや学生のニーズに対応した多様な支援メニューを構築していく。心理学の教員や実技分野の教員の教育研究能力、事務職員の実務能力や社会経験、また障害者のための支援では学生の協力など、あらゆる支援コンピタンスの活用が図られる。

「学芸カフェテリア」には現在実施されている学生支援の他に、多種多様な支援メニューが提供される。例えば、グループや個人を対象にしたものから全学年対象のものまで、論文執筆や音楽やスポーツの技能といった実技スキルの向上から対人関係力やコミュニケーション力などのソーシャルスキルの育成までと、体系化された多様な支援メニューが用意され、専門家による心理カウンセリングや心理療法なども、随時、受けることができるであろう。

(2) キャリアプランナーと学芸キャリアカフェ

キャリアプランナーは学生が支援メニューを効果的かつ適切な時期に選択し計画できるよう、常時、助言・指導する。面接やメール等による相談を受け、学生に自分の今の時期のキャリア発達課題を意識させ、支援メニューの活用を動機付ける。

学生はウェブ上で支援メニューを選択・登録し、キャリアプランナーへの相談も常時メールで可能だが、学内に「学芸キャリアカフェ」を設置し、学生とキャリアプランナー（あるいは全学ファシリテーター）がいつでも自由に会話できる場所と機会を提供する。

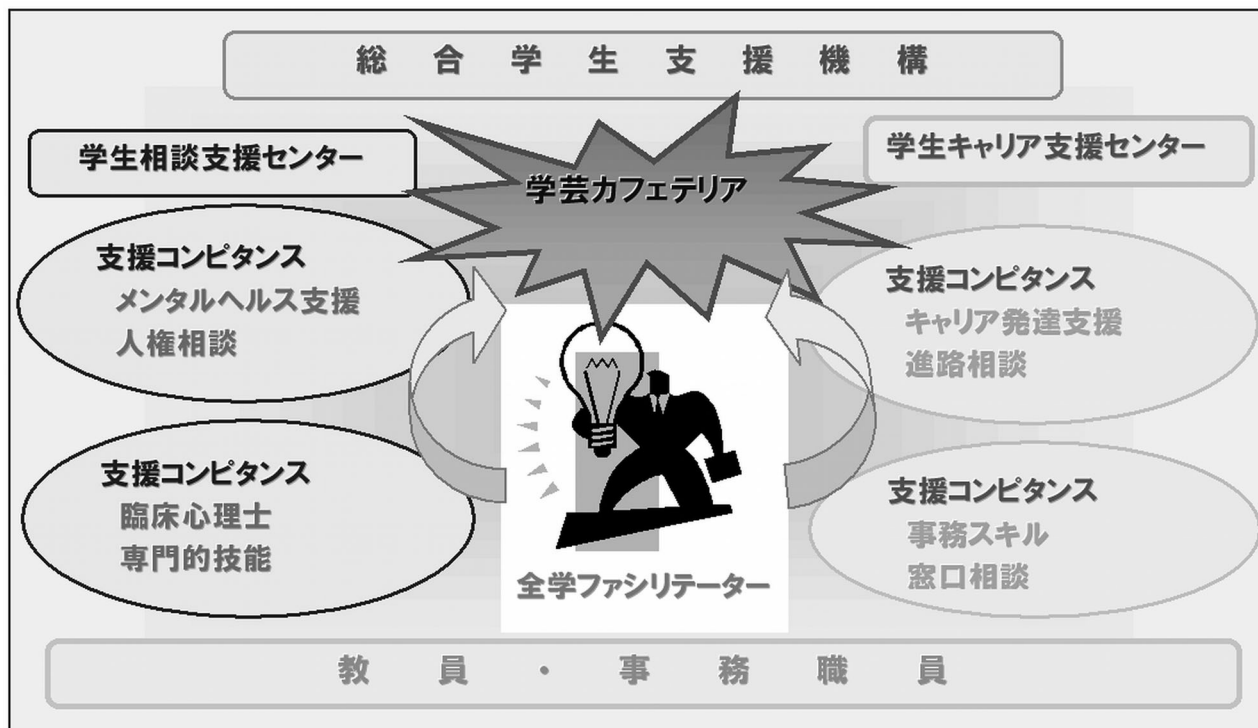


図1 全学ファシリテーターの役割

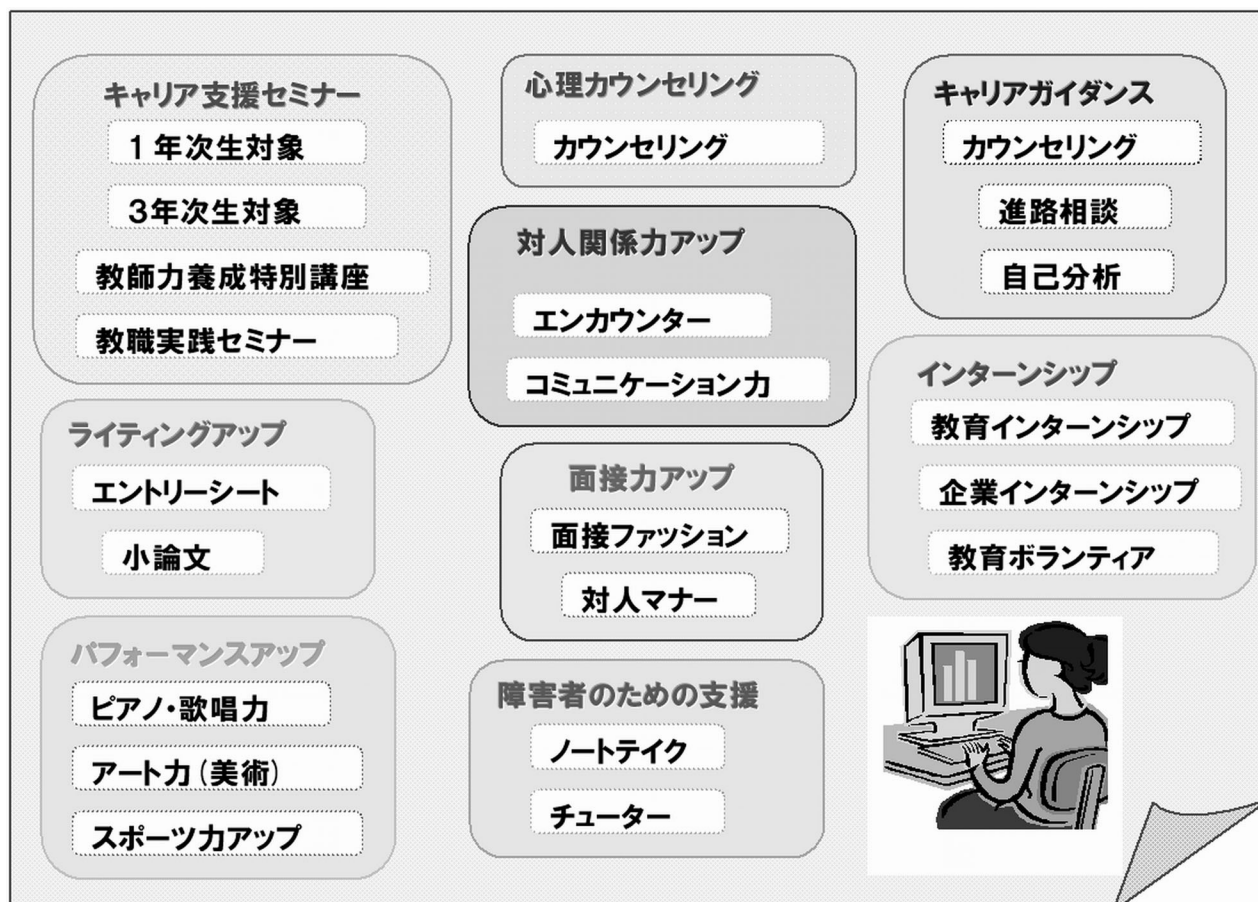


図2 ネット上の「学芸カフェテリア」支援メニュー
(一部のみ掲載)

(3) 教員養成系大学・学部への支援モデルの提供

学芸カフェテリアではウェブ上で運用されることから、学生の動向、趣味、満足度などをデータベース化し、学年、性別、時期別に最適な支援メニューを構築することができる。この最適支援メニューは、他大学、とりわけ教員養成系大学・学部にとってきわめて有効な支援モデルとなるであろう。ウェブ上に公開したり、印刷物等を通して普及させる。

5. 本プログラムの有効性（効果）

(1) 期待される効果

本プログラムでは全学ファシリテーターが組織や教職員の支援コンピタンスを「見える化」することで、組織や教職員も自分が持っている学生支援のためのコンピタンスを意識化することができる。これにより今後、組織や教職員の学生支援への積極的な取組を促し、多くの成果が期待できよう。他方学生は、自分で支援メニューを選択して、積極的に自分のキャリア形成に参加するが、当初の目的を果たすことで達成感を味わい、自分でキャリアを開拓していく自信を深めるであろう。また自分のキャリア発達課題に気づき、それらを解決するために計画や選択して行動に至るといった心的・行動プロセスを経ることで、彼らの支援コンピタンスも高まり、友人たちや児童・生徒への援助資源を育むことになる。

(2) 現在ある支援との期待される相乗効果

本プログラムでは、随時新しい支援メニューを追加・更新していくが、現行と新規の学生支援との相乗効果も期待できる。特に学年や時期が固定されたキャリア支援セミナーなどと、学生が自分の学修計画や必要に応じて選択できる支援メニューを柔軟に組み合わせることで、学生支援の効果も高まるであろう。

(3) 社会的ニーズと学生の個的ニーズに対応した支援メニュー

学芸カフェテリアは、高機能発達障害をもつ学生や教育実習で不適応を生じた学生の支援メニューを含み、特別なニーズに対応しているが、今後支援体制と内容の充実がさらに求められる領域である。また本学は学校や一般企業・官公庁でのインターンシップや教育ボランティア活動を、社会との協同で行われる大学教育のひとつとして位置付け、学外活動を支援メニューとして、社会との連携を援助資源として活用している。

6. 本プログラムの改善・評価

(1) 学生モニター委員会と外部評価委員会の設置

学芸カフェテリア推進委員会（後述）は毎年度、学生から学生モニターを募り、委員会を設立する。またキャリア教育や人材育成の専門家等の4名による外部評価委員会を設置し、年度ごとに外部評価を行う。最終年は4年間の活動を総括した最終評価となる。

(2) 評価の観点

学生モニター委員会は、学芸カフェテリアの運用状況、支援メニューの満足度、今後必要な支援メニュー等を学生の視点で調査する。また外部評価委員会は、学生の満足度の他、相談者件数や就職率等の数値データや学生への面接によって評価を行う。

(3) 評価の活用

学生モニター委員会の評価は、次学期の支援メニューの精選に活用される。外部評価委員会による年度ごとの評価は、次年度の支援メニューの精選だけでなく、事業全体の運営方法や支援体制の改善に活用する。最終評価では事業全体を評価し、補助期間終了後の学生支援の指針に反映させる。

7. 本プログラムの実施計画・将来性

(1) 実施計画

2007（平成19）年度後期は準備段階であり、総合学生支援機構で全学ファシリテーターとキャリアプランナーを選任し、学芸カフェテリア推進委員会を発足させる。以後はこの推進委員会が、2008（平成20）年4月からの運用に向けての準備を行う。また学生ガイダンスやニュースレター（第1号）により学内周知を図り、学生モニター委員会と学芸カフェテリア外部評価委員会を設置する。また他大学で「学芸カフェテリア」のモニタリング調査を実施し、大学関係者や学生の意見を聴取する。

2008（平成20）年度4月から運用を開始する。前期の運用終了後（7月末）実績や学生モニター委員会の評価を分析し、その結果を反映させた後期用メニューを策定する。年度末には1年間の利用状況や効果等を検証し、外部評価を行う。また学内向けニュースレター、学外向けブックレット「学芸カフェテリア」を発行し、本学の取組を広く周知する。

2009（平成21）年度と2010（平成22）年度は、前年

度と同様の取組を行う。最終年となる2010（平成22）年度末には、4年間の取組を総括し、全体に関する外部評価を行う。また最終報告書を作成し、全国の関係機関に送付し、本取組全体の実績や今後の課題の周知を行う。

（2）カフェテリア推進委員会の設置

本プログラムの推進母体として、全学ファシリテーター、キャリアプランナーを中心としたカフェテリア推進委員会を常設し、総合学生支援機構のもとにおく。理事（教育等担当副学長）の直属の組織とし、総合学生支援機構の各組織と連携し、教職員の協力を得ながら、リーダーシップをもって事業を推進する。

（3）人的・物的・財政的条件の整備状況

2006（平成18）年度の学生相談支援センターの設置に際して、カウンセラーや相談員を「特任（准）教授」として採用し、学生のためのキャリア支援セミナーや

教職員研修での講師などの本学での教育活動への参加や、指導教員と連携した学生相談を可能とした。2007（平成19）年度からは学生情報トータルシステムを整備し、ウェブによる学生への学務情報伝達を総合化した。これによって、学生は大学での4年間の学修を一体化されたものとして把握することができ、「学芸カフェテリア」構想の前提となった。

（4）将来性

本学は我が国の教員養成の基幹大学として、総合的・段階的な学生支援を今後も発展させていく。本プログラムによって発掘される学内の援助資源は、今後の発展にとって大切な資源となることは確かである。補助期間終了後も、全学ファシリテーターとキャリアプランナーを特任（准）教授として採用し、本プログラムで採用された3名のうち1名は、本学の専任教員として、学生相談支援センターまたは学生キャリア支援センターに配属する。

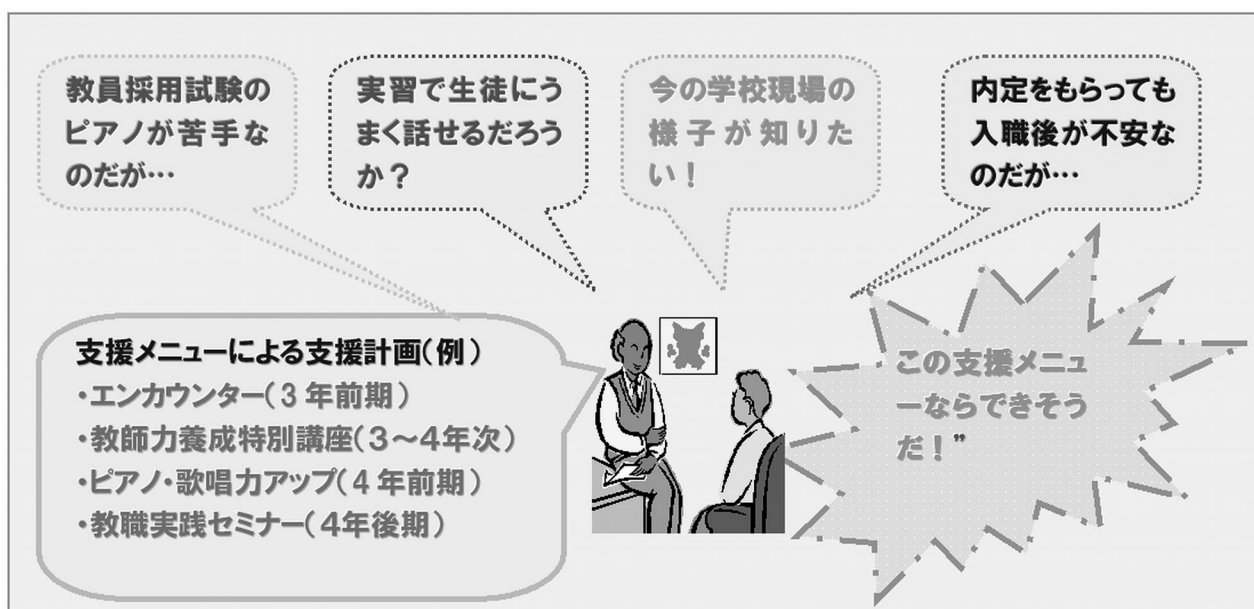


図3 キャリアプランナーの役割

表1 「学芸カフェテリア」の実施計画

実施計画	平成19年度	平成20年度		平成21年度		平成22年度	
	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期
全学ファシリテーターの選任	○						
キャリアプランナーの選任	○						
学芸カフェテリア推進委員会の設置	○						
学生モニター委員会の設置（開催）	○		○		○		○
外部評価委員会の設置	○						
次学期メニューの決定	○	○	○	○	○	○	○
学芸カフェテリアの整備（更新）	○	○	○	○	○	○	○
学生ガイダンス	○	○	○	○		○	
カフェテリアの運用		○	○	○	○	○	○
ニュースレターの発行	○	○	○	○	○	○	○
ブックレットの発行	○		○		○		
外部評価	○		○		○		○
調査・広報活動	○	○	○	○	○	○	○
最終報告書の発行							○

選
定
理
由

東京学芸大学においては、「期待される大学生活」を学生に提示し、勉学のみならず、教育現場との多様な関わりやサークル活動・ボランティア活動などを通じて、学生の成長を目指しています。学生支援の取組を具体的かつ組織的に実施しており、大きな成果を上げていると言えます。また、「教育実習メンタルヘルス支援委員会」は、教員養成を中心とする大学ならではのユニークな活動であり、他の大学等の参考となります。

今回申請のあった「学芸カフェテリアによる学修・キャリア支援」の取組は、学生支援のためのコンピタンスを「見える化」するために、ネット上に「学芸カフェテリア」を設け、それとともに、学生が支援メニューを選択し、積極的に自分のキャリア形成に参加するというものです。特に、学生支援に関する情報を一元化し、さらにそれを成長させていこうとする試みはユニークで、アイデアとしても優れています。ただ、このシステムをより多くの学生が使いこなしていくためには、さらなる工夫が求められます。また、このシステムが大学の全教職員の総意のもとに運用される必要があります。

全体として、創意工夫にあふれた企画であり、他の大学等の参考となる優れた取組であると言えます。